『自分探し ～セクシュアリティをみつめて～』の授業展開

家庭科　分　校　淑　子

Ⅰ．はじめに

現代は「自分探し」の時代と言われる。本当の自分をみつめることが，人生の課題となっている。それは逆に，意識しなければ自分自身がわからなくなるような時代であることの象徴でもある。このような時代に，自分自身を客観的に見始め，自分探しを始める時期にある高校生は，どのように自分自身に出会うのだろうか。

高校生が最も多くの刺激を受けるのは，やはり学校生活であろう。しかし，戦後の偏差値社会は，学校教育を「学校知」の習得と受験合格にほぼ終結させてしまったと言える。そのことに関して，特にここでは言及しないが，高校時代から，学ぶことの意味を考える余裕は失われ，生徒の学ぶ意欲が低下していることは疑いのない事実であろう。この流れの反動として，一部からは，学ぶことの意味を問い直し，生徒の主体的な学びを取り戻そうとする動きも出てきている。その力が，生徒たちの内面に揺さぶりをかけ，硬直化した社会や学校の価値観に風穴を開けられるのかもしれない。

高等学校家庭科では，青年期以降の自分の生き方を考えることや男女の関係を問い直すことが，大切な柱となっている。この視点を「自分探し」のキーワードに位置付け，自分をみつめさせることを通して，生徒自身の学ぶ力を育てていきたい。

本稿では，平成８年度の１年生３クラス（男子64名，女子55名，合計119名）を対象に３学期の家庭一般の授業で行った「自分探し～セクシュアリティをみつめて～」の内容を提示すると共に，授業ごとの生徒の意見・感想から授業についての考察・評価を行いたい。

Ⅱ．授業全体の視点と目的

一般に，「価値観」を伴うような授業内容はあまり評価されない傾向にある。教師の偏った価値観が生徒に反映することを怖れるためである。もちろん，教師の価値観の押し売りは論外であるが，正解やノウハウを教え込むだけの教育の限界に直面しているのもまた事実であろう。自分の価値観を耕す授業，そんな授業が今，必要なのではないかと思う。

本授業を通して，正解を教え込むのはもちろん，一つの正解に向けて導くのでもない，生徒一人一人の価値観を育てていくことを一つのねらいとしたい。それには，まず現在の自分の価値観を意識してみることが必要である。さらに，社会の価値観，色々な人の価値観を知り，それらについての自分の意見を持つことによって，価値観は育っていくのであろう。

同時に，男女共生社会の実現は，これからの社会の大きなテーマである。その鍵となるジェンダー，セクシュアリティについて「個人的問題」という見せかけのバリアーを外して，真面目に男女が語り合う必要があると思われる。

本授業を通して男女の関係を問い直し，自分らしい生き方を模索する一助としてほしい。

以上の視点を受けて，本授業の目的を以下の２点とする。

(1)　ジェンダーやセクシュアリティの概念を知り，固定化した男女のあり方を捉え直すことが

できる。

(2) 社会一般や他の人の意見に触れ，自分自身の価値観を育てることを通して，自分らしい生き方を模索していくことができる。

Ⅲ．授業内容と生徒の意見

授業は，２時間連続，週１回である。４つのセクションは相互に関連し合う内容だが，それぞれ１週または２週で区切りとなるようにした。

授業の全体像を表１に示す。

表１　授業の全体像

(1) ジェンダー	（２時間）
「ジェンダー」と「セックス」について理解し考える。	
(2) 異性	（４時間）
異性への質問の回答を集計し，結果と考察を発表する。	
(3) 美の鎖	（２時間）
美を求められる女性と，その背景を考える。	
(4) セクシュアリティ	（４時間）
映画「告発の行方」を通して，自分自身のセクシュアリティをみつめる。	

本授業では，全体を通して，教師が結論をまとめるのではなく，授業で受け取ったことをもとに，生徒一人一人が考え，自分自身の意見や価値観を育てることが大切である。そこで，各セクションごとに，最後15分程度時間を取り，感想や意見を書かせ，無記名で提出させ，次の授業のはじめに一部を読み上げることを繰り返した。

１．ジェンダー

(1) 授業のねらい

男女共学家庭科の第一の柱は，男女平等と男女共生の実現をめざすことである。一言で男・女と言っても，その中には，生物学的な要素の部分と，後天的に身についた社会的・文化的な部分がある。従来それを性差という一つの言葉で表し，認識していたことが，本質的な男女平等の実現や男女の共生を阻む一つの要因であったのではないだろうか。社会的・文化的性差である「ジェンダー」を，生物学的性差である「セックス」と区別し，認識することが，男女平等・共生社会への第一のステップであると思われる。本セクションでは，身近な生活から「ジェンダー」に関する理解を深め，自分のジェンダー観を客観的に確認できるような授業を試みた。

本セクションのねらいは，「生物学的性差であるセックスと社会的・文化的性差であるジェンダーについて理解すると共に，現代社会や自分自身のジェンダー観を知り，自分の生き方をみつめ直すこと」である。

(2) 授業実践の内容

導入に以下の文章を提示し，「この文章に不可解な点があるかどうか，あるとしたらどのようなことか。」について質問した。

父親と息子がドライブに出かけ，途中で事故にあった。父親は即死し，息子は重体で病院に運ばれた。手術室で彼をみた外科医は，「これは私の息子だから私には手術できない。誰か他の医師を呼びなさい。」と言った。

ほとんどの生徒は，即死した父親が，手術室に再び現われることを不可解な点とするが，これは，外科医＝母親と考えれば，何も不思議はない。このことに気づく生徒は，クラスに１人いるかどうかであった。医者という職業は，もちろん男性に限った職業ではないが，現在の日本では男性の数が多く，とりわけ外科医はその傾向が強い。本校では，女医志望の女子がクラスに数人はいるが，自分で目指しながらも気が付かないのである。生徒たち若い世代にとっても，職業に対するジェンダー意識は根強い。

その後，セックスとジェンダーの定義を説明し，自分の小さい時からの育てられ方や投げ掛けられた言葉などを振り返らせた。赤などの暖色は女の子，青などの寒色は男の子という色分けや，「男の子は泣くんじゃない」「女の子なんだからおとなしくしなさい」などの躾である。

一つのジェンダー文化として昔話や物語の分析も行った。シンデレラ姫やしらゆき姫，眠り姫等に共通するのは，美しさ，生まれのよさ，素直さ，従順さ，突然の不幸，忍耐，無言，そして王子さまに見初められての結婚が女性の最高の到達点であり，ハッピーエンドとして疑われないことなどである。それとは逆に，幸せになれなかったお姫さまの代表に，人魚姫がある。彼女が他のお姫さまと違ったのは唯一，待っていなかったこと，自分から行動してしまったことである。（但し，ディズニーのリトル・マーメイドはハッピーエンドである。）逆に，男の子が主役の桃太郎，一寸法師，金太郎には，強さやリーダーシップがまず問われ，それがあれば自然と高い地位やきれいなお姫さままでもついてくる。ところが，強さの感じられない，やさしいだけの浦島太郎は，悲劇的な結末を迎える。そして，心理学者，小倉千加子によれば，このお話には「だから女を好きになるのもいいけどな，身を持ち崩すんじゃないぞ」[1]というちっちゃい男の子へのメッセージがこめられているという。つまり，ほんの短い間でも魅力的な女に溺れて自分を見失ってしまうと男としての社会的地位はなくなってしまうんだぞ，という教訓が隠されているのである。子どもたちが信じたかどうかはわからないとはいえ，このようなお話を聞かされて育ってきたことには間違いはない。

最後に，ジョン・マネーの『性の署名』から，セックスとジェンダーにずれの生じた半陰陽の人たちの思春期以降の生き方の選択を紹介した。彼らの多くは，「自然」といわれるセックスにジェンダーを合わせるよりも，例え肉体的苦痛を伴おうとも，これまで信じて育ってきた，ジェンダーにセックスを合わせるほうが抵抗が少なかった。これは，上野千鶴子によると，「第一に，生物学的還元説に対して，セックス（生物学的性差）とジェンダー（心理学的性差）とは端的に別なものだとあきらかにしたこと，第二に，だからといって，ジェンダーが自由に変えられるようなものではなく，その拘束力が大きいこと」[2]を証明しているという。これについての説明をし，締め括った。

(3) 生徒の意見・感想

(a) ジェンダーという言葉は初めて聞いたけど，私がずっと考えてきたことだった。「女のくせに…男のくせに…」を使う大人（40代以上の男性に特に多い）に反感を抱いてきた。困ったのは先生の中で，授業中にはっきりと男女差別をする人がいるということだ。私はそういう先生にすんごく反抗したが，言っても無駄だと思っていたから言いはしなかった。

(b) 今まで，あまり考えたことがない内容だったけれど，ジェンダーってすごい影響力があるんだな，と感心した。発見することの多い授業だった。

(c) ジェンダーというのは，すごく重要なものだが，恐ろしいものだとも思った。当たり前に男だと思っていた16年間だったが，今日の授業で，いかに自分は周囲につくられたか，社会環境に影響されて今の自分になったか教えられた。

(d) わたしは女だけど，この社会のジェンダーは，変わってほしいと思っています。母は，父と同じく働いているのに父は母が家事を全てするのが当然と思っておりいつもゴロゴロしています。これからの時代は，男と女，同じような扱いが大切なのではないかと思います。

(e) 世の中ってジェンダーみたいなものが一杯あって，ある面でそれに迎合しないと生きていけないことってあるんじゃないかな。わたしは女でよかった。オシャレもできるし好きな人とのプラトニックな幸せを実感できるし…。

(f) ジェンダーを否定する向きが今の社会には多いと思うが，もっと積極的に評価してもいいのではないかと思う。男性だったら力が強く，女性だったら母性本能がある，とかみたいにそれぞれの性が適合するように人間の社会・ジェンダーが形成されてきたのである。ぼくは，無理に否定的にみることには反対である。

(g) 今までで一番おもしろい授業だった。ジェンダーって言葉は初めて聞いたけどなるほど確かにそうだと思った。ぼくは，本来，男と女の間に境界線なんかないんだと思う。なぜ，区別が必要なのかと疑問に思った。

(h) 私は昔すごい女の子っぽい子供でした。フリルのスカートとかピンクとか大好きで，お姫さまとかに憧れていました。だけど，幼稚園に通っているうちにだんだん，可愛くなきゃお姫さまみたいにhappyにはなれないんだと気づくようになりました。私にとって忘れられないのは，劇で『不思議の国のアリス』をする時，すごくアリスの役がしたくて立候補したのに，先生はすごく可愛い子をアリスに選んで，私はおばあさん役になったことです。悲しく思いながら，「男っぽくなってやる」と心に決めました。髪をショートにして，青や黒の服を着るようにして，がさつな人になろうとしてきました。だけど，中学ですごく好きな人ができた時，素直に生きてこなかったことを本当に後悔すると同時に，やっぱり可愛くなきゃ生きていけない…と思い，この世界を恨みました。

(i) 昔話は，意外とひどい。そこから得る教訓は，ぼくにとってきびしいものだ。

(j) 性格や好みとかはジェンダーによって決まると思う。だから，自分がもし半陰陽だったらやっぱりジェンダーの性別で生きたいです。

(k) 少女マンガを男が読んでいると白い目で見られるのは辛い。男だって恋愛ストーリーを見たいんだ！

(4) 考　察

生徒の意見・感想の(a)にもあるように，「ジェンダー」という言葉をはじめて聞いたという生徒は多く，「ジェンダー」という言葉自身はまだ高校生世代に浸透していないことが伺われた。しかし，その概念に関しては，(a)のようにこれまでも意識してきたという生徒と，(b)のようにこれまでほとんど意識したことがなかった生徒に分かれていた。どちらにしても，(c)にもあるように，自分が育ってきた中で，ジェンダーの影響が強く関わっていたことは，共通して感じたようであった。

この，ジェンダーに対する価値観は二分されるが，それは性別によるものではない。(d)の女子が，父母の姿から現代のジェンダー観を否定的に捉えているのに対し，同じ女子でも(e)のよ

うに，女である自分の状態に満足しているためか，社会のジェンダー観を受け入れている者もいた。一方男子についても(f)のようにジェンダーは必然的なものであると考え，ジェンダーフリーの方向性を否定する者もいれば，(g)のようにジェンダーによる区別そのものの必要性を疑問視する者もいた。

(h)の生徒の感想は，クラスで読み上げることは控えたが，大変インパクトが強く，ジェンダーやセクシュアリティにまつわる大変重要な点をついた経験談である。

(i)(j)(k)のように授業で扱った事例について，自分にひきつけて感想を書いている者も多かった。

全体的に，「興味があった」「おもしろかった」などの感想が非常に多く，同時に自分自身にひきつけてジェンダーを捉え，考えてあった。『自分探し』の始めのテーマとしてふさわしいものであったと思われる。

今後，これまでジェンダーの概念を意識していた生徒と意識していなかった生徒について，また，ジェンダーを肯定的に捉えているか否定的に捉えているかなどについて，授業前後の変化を統計的にみることも試みたい。

2．異　性

(1)　授業のねらい

大多数の高校生にとって，異性の存在は大きく，同時に，異性は一番身近な異文化ともいえる。知りたいこと，聞きたいことは多くあるが，普通，面とむかって聞くことはできないようである。これは，思春期に最も強いが，その時の溝が，大人の男女の生活観や価値観を隔てる大きなきっかけにもなり得る。そこで，本セクションでは，各自が異性に対して質問した回答を集計し，考察をつけて発表し合うという試みを行った。

本セクションのねらいは，「一番身近な異文化としての異性に質問することにより，異性の価値観，延いては同世代の価値観を知ると同時に，自分の価値観を客観的に捉えることができる。また，それらをまとめて発表することができる。」である。

(2)　授業実践の内容

事前に，「異性に聞きたいことを一つ考えてくる」という宿題を出しておいた。授業の始めに，生徒はその質問を小さな紙に書き，無記名で男女別に提出する。それを教師が番号を付けながら黒板に書き写す。生徒は，あらかじめ番号と切り取り線のみ印刷してあった用紙に回答を書き，切り離し，同じ番号の書かれた袋に一枚づつ入れる。全員が提出し終わったら，生徒は自分で集計・考察したい質問（自分が出した質問とは限らない）を選び，その番号の袋から用紙を取り出し，集計し，結果をまとめ，自分なりの考察を考える。その後，一人一人結果と考察を発表する。

質問例を表２に示す。

質問内容は，男女共に(a)(b)(c)や(m)(n)(o)のように日常的な疑問を質問としたもの，(d)(e)(f)や(p)(q)のように，結婚と女性の職業にまつわる将来的なものや男女差別に関わるもの，(g)や(r)のように自分自身への評価に関すること，(h)や(s)のようにタレントに関する好みなどが，それぞれあった。男女で傾向が大きく異なったのは，恋愛やそのつきあい方による質問で，男子からのものでは，(i)のような内面的な質問は極少数だったのに対し，女子からは，(t)(u)(v)のような質問が多数あった。一方，男子からは，(j)(k)(l)のような肉体関係を伴うつきあいに関するものが

表２　異性への質問例

【男子から女子へ】

(a)　家では何しているんですか？
(b)　どうしてトイレに一緒に行くんですか？
(c)　スカートは便利ですか，寒くないですか？
(d)　将来，結婚するつもりはありますか？
(e)　結婚しても自分の職業の道を選びますか，それとも家庭生活の面倒をみてくれますか？
(f)　女だからといって男性から何か差別を受けた時，その男性に対してあなたはどう思いますか？
(g)　あなたは，このクラスで自分が平均より可愛いと思っていますか？
(h)　嫌いなタレントの名前を教えて下さい。
(i)　男から告白するべきか？
(j)　付き合ったらSEXしてもいいですか？
(k)　援助交際，何円でラストまで？
(l)　処女ですか？

【女子から男子へ】

(m)　あなたがもし女だったら，何をしてみたい？
(n)　今何に１番興味がありますか？
(o)　ひげは生えてきますか，毎朝剃っていますか？
(p)　結婚したら，家事をするつもりですか？
(q)　結婚したら奥さんには，仕事をやめて家に入ってもらいたいですか？
(r)　自分で自分を「カッコイイ」と思った時はありますか，あったら，それはどんな時ですか？
(s)　好きな女性タレントは誰ですか？
(t)　好きな人はいますか？いる人は同じ学校ですか，違う学校ですか？
(u)　もし，friendとしか見てなかった子が急に痩せてきれいになったら，恋愛の対象になることってある？
(v)　自分が告白するか，女の子から告白されるか，どちらが好みですか？
(w)　好きでもない子とセックスできますか？
(x)　初Hにむけて，今から勉強してますか？

【教師からの男女共通問題】

(y)　神様があなたの望みを一つだけかなえてくれると言ったら，あなたは何を望みますか？
(z)　理想の異性像は？

とても多く，女子からはそのような内容は少なく，あっても(w)のように内面と絡めた質問である場合もあり，(x)のようなストレートな質問は極めて少なかった。これらの傾向は，ほぼ予想されたことである。

生徒からの質問が出された後，教師から男女共通に(y)(z)の質問をつけ加えた。

集計結果と考察の発表の例を以下に示す。

発表例　1

（質問）
「あなたの考える『つきあう』にSEXは含まれる？」（男子から女子へ）

（集計結果）
・は　い……８人
・いいえ……３人
・結果的にそうなるなら……５人
・大学生になったら……２人

（考察）
まあそんなところだろうと思う。「いいえ」を肯定するわけじゃないが，考えなしに「はい」といっている人は，後悔しないように，もう一度考えるべきだと思う。

発表例　2

（質問）
「高校入学後，恋をしましたか？」（女子から男子へ）

（集計結果）
・ＹＥＳ……９人
・Ｎ　Ｏ……11人

（考察）
附属高校の男子は，そんなことに関心もないのかと思っていたので，YESが９人もいたのは意外だった。でも，NOの人の中に「これまで，一度もしたことがない」と書いてある人もいて，やはり，勉強第一の人もいるんだなぁと思った。

近年，一般に女子高生の性は急速に開放的になってきていると言われる。本校でも彼女たちの言動などから，その傾向は感じていたが，男子が出したいくつかの性的な質問に対する回答は，どれも明らかに開放的な女子高生の存在を示していた。但し，その結果に驚いたのは，教師以上に問題を出した当の男子だったようで，発表例１の考察にもあるように，女子の開放的な価値観を戒めるような考察が多くみられた。

しかし，多くの女子にとって，質問内容からも推測されたように，最も関心が高いのは，恋愛にまつわる感情面である。回答結果には，男子も恋愛に対して決して無関心ではないことが表れており，それを女子は「意外だった」と驚きつつ評価している。

教師からの共通問題に対しての回答は，その結果のみをプリントにして配布し，考察は，生徒個人で考えるよう促した。結果は，(y)では男子が「全知全能」「魔法使い」など，万能を望む者が最も多かったのに対し，女子は，やはり「両思いになること」「運命の人との出会い」など恋愛に関することと，「きれいになる」など外見の美を願うものが多かった。(z)では表現は千差万別であったが，やはり男子の求める理想像には外見に関する言葉が目立ち，女子の求める理想像には「やさしい」という言葉が目立っていた。これらの結果は，次のセクション「美の鎖」

の教材となる。

(3) 生徒の感想・意見

(a) 質問とその結果を，全体的に見て，男子は「男は女より上」という考え，女子は「男と女は同じ」という考えからなるものが多かったと思う。これは，日本の「ジェンダー」かなと思った。これからは，どんどん変わっていったらいいと思う。

(b) 意外とみんな正直に答えているような気がした。

(c) 女子はみんな嘘つきだと思う。

(d) 同じ人間として生まれてきたのに，男と女は全く違うものだなあと思った。15～6年間生きてきた中で身についた「ジェンダー」とはおそろしいものだ。永遠に男女間の隔たりはなくならないのだろうか。しかし，少しはお互いのことを知ることができた。普段はこういった接点さえ持てないので，いい経験だったと思う。

(e) 男子は普段何を考えているかわからなかったけど，男も女も同じところをもっているんだなぁと思った。意外と近い存在なんだなぁと思った。

(f) 男子と女子とで,傾向のようなものもあったけど,男女で違うというより個人として違うって感じだった。

(g) 今回の企画は“異性を知る”ということだったけど，どちらかというと“クラス全体を知るというイメージが強かった。異性だけでなく同性の考えていることもよくわかった。

(h) 私はずっとこの高校の男子は女子など目にも入らず，勉強一筋の人が多いんじゃないかと思っていたので，意外なことが多かった。これを機に残り2年間を一緒に学んでいく友達として，もっと知り合えたらいいなと思った。互いの性を尊重できるような自分に変わりたいと思う。

(i) この授業をきっかけに世界観を変えちゃう人もいるだろうと思うと少し怖くなった。

(j) 集計結果を聞いて，ショックを受けたりもしたけど，今回の授業は，これからの人生でかなり役に立つと思います。

(k) 考察が一番おもしろかった。個人の色がとてもよく出ていた。次回も，自分たちで考察を考える授業をして欲しい。

(l) 一つの質問に対して,もう少し詳しく男女でフリートークをして意見を言い合ってみたかった。

(m) すごくおもしろくて楽しかった。他のクラスのものや，できればこの学校以外の人たちの考えも知りたいなと思った。

(n) 意地悪な質問はやめた方がいい。答えたくない質問もあった。これが現実なのだから，不愉快でも，仕方ないのかもしれないけど…。

(o) 大変興味深い授業だった。今後の自分作りの参考にもなりそうだ。調理実習と並ぶくらい，自分にとってはいい授業だった。

(p) 学校ではタブーとされていることを今回は思いっきり書けて楽しかった。こんな授業の方がテスト用の授業よりずーっと大切だと思う。

(4) 考　察

授業では，教師からは特に何も言わなかったにも関わらず，(a)や(d)のように，§1のジェンダーの学習を関連づけて考えることのできた生徒が多くいた。これは,「ジェンダー」をよく理解していた結果でもあり,本セクションによって「ジェンダー」の学習を深められたとも言える。

同じ集計結果や考察を聞きながらも，皆の回答に対し(b)と(c)のように正反対のことを感じ取った生徒がいた。同様に，同じ授業でありながら，(d)は男女のジェンダーによる違いを実感し，(e)は男女の共通性を感じ，(f)は，性差よりも個人差の違いを重視したという三者三様の意見・感想であった。さらに，(g)は異性に質問しながら，同性の回答や考察などにも新たな発見を見いだし，異性に留まらず同性も含めたクラス全体のカラーを知ることができたと分析している。これらは，個人の感覚や価値観によるものであり，正解・不正解ではなく，どれも大切な一人一人の意見である。このような，自分とは異なる様々な意見があることを知ることは，授業を通しての，もうひとつの異文化体験であろう。

(h)はこの授業を契機に，高校生活や自分のこれまでの価値観までも見直し，前向きに考えようとしていることがわかる。この授業が，生徒にとってとてもインパクトの強いものであったことは，多くの生徒の感想から伺われたが，それだけに(i)の言うように“怖い”授業でもある。一見楽しいだけの授業にも受け取られがちだが，生徒は一言一言に敏感に反応し，それぞれの価値観で，様々な解釈をする。そのことを教師は，しっかり認識して，生徒以上に敏感に授業に感じとらなければならない。色々な刺激を与えられれば当然傷つくこともあろうが，それでも(j)の言うように貴重な経験になると思う。

これからの授業の参考や課題となるいくつかの意見・感想もあった。他の人の発表した考察に共感したり，異議を唱えたりしてあったものも多くあった。生徒はあまり意見を言えないだろうと予想し，担当した質問の考察の発表のみで終わらせたが，(k)の言うように個人の考察はこの授業にとって，大きな要となり，担当分以外のものにも，自己表現したい生徒は多かったようだ。(l)のいうフリートークも可能だったのではないかと思われる。授業の流れを伺いながら，できれば次年度からは取り入れてみたい。また，(m)の言うように，クラス内で留まらず，他のクラス，他校，インターネットなどを用い外国の高校生とも…とできるだけ拡げられればいいと思う。課題として最も大きいものは(n)の意見にあることだと思う。私は基本的に，どんな質問であろうが生徒の書いたものには一切手を加えず，そのままを提示してきた。今後もこの姿勢は変えたくないと思っている。しかしこれでは(n)のような意見が出るのももっともである。そこで，次年度からは，回答者が「答えるに値しない問題」だと判断したら「回答拒否」とはっきり書くことをルールとして加えようと思う。その意思表示は，また一つの価値観の印でもある。

(o)や(p)のような意見が沢山あり，とても勇気づけられる授業だった。生徒は決して単なる興味本位の授業ではないことを理解していたようだ。教師が言わなくても，出された質問や回答，考察を通して，異性の，クラスの，そして個人の価値観やカラーを見いだし，しっかりと自分の生き方や感じ方，価値観に反映させ『自分探し』をしているようであった。

3．美の鎖

(1) 授業のねらい

§２異性のアンケート結果から，男子の多くが理想の女性像に外見の美しさを求めていた。同時に，女子は男子からみた自分の外見を非常に気にしている傾向もあった。これらの傾向は何に原因があるのかを探ることを通して，ジェンダーや異性の授業を発展・統合させようと試みた。

本セクションのねらいは，「なぜ女性に強く“美”が求められてきたのかを探ることを通して，男女の関係，女性の生き方を見直すこと」である。

(2) 授業実践の内容

導入で§２異性のアンケート結果から，男子の多くが理想の女性像に外見の美しさを求め，女子は男子からみた自分の外見を非常に気にしている傾向があったこと，そのことが感想にも多く書かれていたことを話した。本セクションの課題は，なぜこのような傾向が起こるのかを考えることであると伝えた。

まず「美」の基準に視点をあてた。記号論を用い，現代日本の女性の「美」を解読したあと，映像を通して中世ヨーロッパの「コルセット美人」，中国の「てん足美人」，首長族の「首長美人」をみせた。それぞれ，細いウエスト，小さな足，長い首が女性の「美」の基準となっている。女性は「美」のために不自由な器具をつけ，健康を害しながらも努力し続けている。しかし，研きぬかれたその姿は，現代の日本人である私たちの感じる「美」とは程遠い。彼女たちの姿は痛々しく，不思議にも思えるが，現代のエステやダイエットも同じことかもしれない。「美」とは何なのか。誰のための，何のための「美」なのか。なぜ，女性ばかりが「美」を求められるのか…生徒に問い掛けてみた。

加えて，井上章一の『美人論』より，明治の女性の階層移動の手段が「美」であったこと，それが商業化の進展，メディア時代の到来により，ますます強化されてきたことを説明した。

(3) 生徒の意見・感想

(a) 女に「美」が求められるのは，男尊女卑の考え方が根底にあるからだと思う。「美」を求める男が増えることは，男が弱くなってきた証拠ではなかろうか。ここでそろそろそんな風潮を見直す必要がある。

(b) 女は何もできないからせめて男のために美しくあれ，という考えがあったから，女性にばかり「美」が求められたのではないか。「女は中身で勝負」という時代は果してくるのだろうか？個人的には，来てほしいものだ。

(c) 最近，いくら仕事とかで成功したりしても，女の一番の幸せは，男からもたらされるものではないかと思う。だから，男が「美」を求める以上，女は合わせようと努力するのだろう。その素直さ，従順さがまた男には可愛く思えるのだろうか…。

(4) 考　察

多くの生徒が，「美」と男女の力関係に関して気づいたようだった。その上で，(a)のように，最近男性の力が弱まったことをよくないと感じるものと，(b)のように女性の力がもっと強くなってほしいと望むものにわかれた。(c)の気持ちは微妙で，自分自身がまさに悩んでいる部分であったのだと思う。権力と「美」を切り離し，「美」を男も女も自分自身の手に取り戻すには，これからもかなりの時間がかかるのかもしれない。その意味から，「美」を「自分探し」の一つの項目に入れるには，無理があったのかもしれない。

４．セクシュアリティ

(1) 授業のねらい

セクシュアリティは「性に関する諸現象の総称」「セックスとジェンダーの複合されたもの」などと定義されている。この定義はかえって理解し難く，その他のいくつかの定義も含めて『セクシュアリティ』を明確に定義したものはないと思われる。上野千鶴子は，「セクシュアリティとは，「無定義概念」である。そして，セクシュアリティ研究とは，人々が「セクシュアリティ」

と呼び，表象するもの，そしてその名のもとで行為するしかたについて研究する領域である。」[3]と言っているが，それがもっとも納得のいく説明かもしれない。私自身，「セクシュアリティ」を，「『ジェンダー』だけでは説明しきれないが，生物学的だけではない人為的な性的差別を匂わすもの。」と漠然と捉えているが，『セクシュアリティ』とは本当に複雑な概念である。定義できない概念を授業テーマとし，生徒に考えさせることは，無謀なことだとも言えようが，たとえ部分的ではあっても「セクシュアリティ」について，自分で深く考え，他の考えも聞き，また自分の価値観を見直すことは，充分価値のあることだと思われる。

本セクションのねらいは，「セクシュアリティの概念にふれ，ある事象に対する様々な意見から，社会一般や自分自身のセクシュアリティをみつめ，見直すこと」である。

(2) 授業実践の内容

まず，映画『告発の行方』を視聴した。この映画は，実際にあった事件をもとに1988年アメリカで上映されたものである。映画のあらすじを以下に示す。

映画『告発の行方』のあらすじ

酒場ミルで，主人公のサラが数人の男にレイプされた。サラは訴えたが，彼女の素行や言動などから，勝算がないと判断した検事キャサリンは，弁護士側との取引によって，裁判もせずに，加害者たちの過失傷害罪（うっかりミスで，相手に傷を負わせってしまったことに対する罪）を確定してしまった。

しかし，このことに傷つき，怒り，哀しみ，自暴自棄となるサラの姿に後悔したキャサリンは，再び立ち上がり，二人はレイプを煽った周りの男たちを教唆罪（他人をそそのかして，罪を犯させたことに対する罪）で，訴えるという前代未聞の裁判を起こした。

レイプ犯の一人ボブの友人であり，ミルで事件を目撃してた大学生ケンの証言を得ることもでき，陪審員の判決は有罪と決定，裁判は勝利に終わる。

映画視聴後，生徒には陪審員制などアメリカの裁判について，極簡単な説明のみを行った。授業の焦点は，教唆罪の確定そのものではなく「レイプ」を解釈する時の視点に絞った。そして，映画中にサラが発した「自業自得」という言葉をとって，「サラがレイプされたのは自業自得だと思いますか？」という質問をし，各自自分の意見とその理由を書かせた。

３クラスあわせて，「自業自得」としたのは男子31名，女子15名，合計46名。「自業自得ではない」としたのは男子26名，女子33名，合計59名だった。双方の理由の例を表３に示す。

「自業自得」派の生徒は，異口同音にサラの軽率さや挑発的な行為などを問題にし，男の行為については，その本能上止むを得ないとしている。いわゆる『強姦神話』[4]が根底にある意見である。これは(d)のような，「自業自得ではない」派の生徒にも共通する意見で「自業自得ではない」とした生徒は，サラの行為とレイプした男たちの行為を天秤にかけた結果，男たちの犯したことをより重いと判断して，「自業自得ではない」を選んだにすぎない。従って，男たちから見たサラの行為を問題にしている点で，基本的に「自業自得」派と同じスタンスにたっている。それに対し，積極的に「自業自得ではない」を選んだ生徒の多くは，(e)のように極短い言葉で，しかしはっきりと加害者に全面的に非があることを言い切ってある場合が多い。さらに(f)では，「レイプ事件」に対する現代社会のマジョリティの考え方を痛烈に批判している。映画では，この視点の違いを検事キャサリンの気持ちの変化として表現し，ラストの判決によってはっきりと主張している。

表３　「サラは自業自得か否か」の理由例

【「自業自得である」の理由】

(a)　まず服装が悪かったと思う。あんな大胆な服を着て，男が沢山いる酒場に行けばレイプされても無理はないと思ったから。それに，彼と喧嘩したからといっても男が沢山いる所でお酒を飲み，酔っ払うなんて，女の子のしてはいけないことだと思ったから。

(b)　彼氏のことでやけになって酒を飲んでいたのはわかるけど，理性を失ってはいけないと思う。サラは軽いノリでゲームに加わったのかもしれないが，あの姿をみたら男を誘っているとしか思えない。全体的にサラの軽い行動が悪かった。

(c)　金髪＋セクシー＋挑発的なかっこで踊るのを見て，男が舞い上がるのは必然的である。

【「自業自得ではない」の理由】

(d)　自業自得ではないとは言いきれないが，やはり自業自得ということ以上に男たちが悪かったのでは，と思うから。

(e)　どんな状況であれ，どんな理由であれ，レイプは男（加害者）が悪いと思うから

(f)　酒を飲んでいても，マリファナを吸っていても，サラは，レイプされた被害者なのであるから，加害者が悪い。大体レイプ事件において「被害者側の方にも原因がある」という考えがあまりに強い現代社会にも問題がある。

授業では，映画視聴後，いくつかの生徒の意見を紹介した後，「レイプ（強姦）とは何か？」という質問を投げ掛けた上で，表４に示す『強姦神話』について説明した。

表４　強姦神話

神話１：レイプされた被害者にも責任がある。（落度・軽率・挑発）

➡例えば，窓の鍵をかけ忘れて泥棒に入られてしまった場合，被害者の落度について注意くらいはされても，責任を問われはしない。

➡女性は，ミニスカートを，男を挑発するためにはいているのだろうか？

➡幼児，高齢者，身体障害者など，弱者も多く狙われる。

神話２：本当に嫌だったら最後まで抵抗できるはずである。

➡「抵抗したら殺されるかもしれない」という恐怖の中，抵抗をしないことは，最善の策ではなかったのだろうか？

神話３：性的欲求不満の特殊な人間だけがレイプ犯となりうる。

➡捕まったレイプ犯には，定職も妻子もある極普通の人が多い。

➡あるレイピストの言葉…「レイプするやつは相手を支配したいんだよ。過去に，女からプライドをめちゃめちゃにされたやつなんだ。だからレイプすることで，プライドと男らしさを取り戻そうとする。」

神話４：顔見知りの間ではレイプは起こらない。

➡東京強姦救援センターの調べによると加害者との関係は，76％が顔見知りであった。

『強姦神話』が当たり前のように信じられている背景は，男性の性欲を本能として肯定し，煽る社会の風潮と，「レイプ」事件を加害者である男性側の視点でのみ捉えることにあるのではないだろうか。

『告発の行方』では，特にその後者を問題とし，「レイプ」を裁く争点を加害者である男性側の視点から被害者である女性の視点へと変換させることを訴えている。

以上の説明の後，まず自分自身のセクシュアリティをみつめ，社会で「当たり前」となっていることでもおかしいと感じたり，疑ったりすることや，いろんな立場・方向から物事を見つめ，自分自身の価値観を育てていくことが大切であると話した。そして，「セクシュアリティ」に関して，女性が自己主張できない世の中は，男女の対等な人間関係など築かれていない事，同時にそれが最後に残った最も難しい課題でもあることを付け加え締め括った。

(3) 生徒の意見・感想

(a) 私自身，性というものに関して考えること事態がいけないことのように感じていた。けれどこの授業を機会に，友達の意見も聞けたりして，何か安心する心さえ抱いた。話を聞けば聞くほど‘どちらが正しい’なんて言うことはつけられず，世の中には，簡単そうでこんなにも難しいことがあるのかと改めて考えさせられた。

(b) 今までは，セックスだとかレイプだとかいうものは冗談半分，恥ずかしそうに友達の間などで話されていた。けれども，今回の授業を通して，それらのことは，恋愛や生き方と同じくらい真剣に語られるべきものだと思ったし，自分自身真剣に考えたいと思った。

(c) 思うに，社会には精神的に未熟な大人が多すぎるのだ。それは，教育の仕方にも問題があると思うし，各人が自分の裏の顔，醜い面や汚い面にはっきりと向かい合わないからだと思う。

(d) セクシュアリティについての授業が始まる時，心のどこかに何かを「嫌」だと感じるものがあった。何か触れてはいけないものに触れてしまったような罪悪感があった。授業中，この嫌な気持ちは一体何者なんだろう，と考えていたが，授業の最後に少しうなずけるものがあったような気がした。すなわちセクシュアリティとは，自分自身を形成しているものであり，自分は自分なりのセクシュアリティに対する考え方を持って生きている。もしこの授業で自分のセクシュアリティに対する考え方，すなわち自分が生きる際の支柱にしているものが動かされてしまったらどうしよう，自分は自信をなくして気力を失ってしまうのではないか，という不安があったのかもしれない。自分はそれを避けようとしていたのだと思った。でも，自分らしく自立していくためには，支柱がしっかりしたものでなくてはならないと思う。この授業を終えて，自分のセクシュアリティに対する考え方を見直そうと思った。

(e) 男性が，「自分は女性より上だ。」と思うのは事実。社会面において活躍したり，力も上回っているからだ。弱い女性を守るために‘強い力’が与えられているのだ。

(f) 男子にとって女子はどんな存在なのだろうか？口では「男女平等！」と言っているけれども本当は，心の中では「女の方が下だ」と考えているのではないか？社会全体がまだそんな考え方を，少なからずしていると思う。「強姦神話」などが生まれること事態女性の立場って非常に弱いのだと思う。しかし，私は決して女性の方が男性より下であるとは思えない。

(g) 根に男らしさの意識とかプライドがあって，色々な事件が起こったりするのか？そんなものは実際影も形もないものだと断言できる。ぼくは，「男というものは…」というものに縛

られずに育ってきたらしい。考えてみれば家庭の様子がそこに密接に結びついている。ということは，家庭環境が違えばどう転ぶかわからないということだ。

(h) 恋愛相手は偏見のない人がいいな。特に結婚するとしたら，私と価値観が同じ人でなければ嫌だ。けれど，私を本当に一人の人間として自立させてくれる人が果たして広いようで狭いこの社会にいるのだろうか？

(i) ぼくはまだ，性的な成長も不十分で，そういった経験がないからわからないだけかもしれないが，男の本能のために，女性が好きな服を着たり，好きな時間に好きな場所にいたいという基本的人権を奪うことはできないと思う。もちろん，今後ぼくたちは，段々と理想と現実のギャップを味わっていくだろうから，自分の考えが，どう変わっていくか，心の片隅にこの問題を置いて，長い目で見ていきたいと思う。

(j) 今の日本のセクシュアリティはかなり間違っている。性犯罪においての加害者中心，男性中心の考え方。いつか，こういう考え方は違うんだと世間につきつけたい。
私は，３～４回痴漢の被害を受けたんですが，その時のまわりの対応は，まさに今日の授業で言っていたようなものでした。当時の私の心の傷はものすごく，例えば小学校低学年の時，中学生に痴漢行為をされかけた時は，それから数年，男の人を見ると顔が青ざめてすごく恐怖感を感じました。家のなかにいても夜がすごく怖かったんです。加害者の中学生を罰することはできないのでしょうか？将来のある中学生の男の子を罰したらかわいそうなのでしょうか？そんなことは，波風たてないほうがいいのでしょうか？被害者の視点でセクシュアリティを見直す世の中にしていきたいです。

(k) この１年，精神的に不安定だったのは，このセクシュアリティが原因だったのかもしれない。忘れたつもりでも忘れられなく…様々なことに不信感を持ったりもした。この授業を通して，少し楽になれた。この１年をようやく抜け出すことができた。

(l) 今まで，ある一定の方向からしか見ていなかったものが，別の方向から見るとまるで違ったもののように見える，そういった授業内容だった。物事をあらゆる方向から見ることの重要さを知った。

(4) 考　察

「セクシュアリティ」の領域は，授業のまとめでも述べたように，男女関係の残された課題，最後の砦である。そして「ジェンダー」のように，明快な学問的解明もまだなされておらず，授業の内容はそのままこの社会の抱える課題でもある。それ故，正解などない課題であり，正解を求める以前に，これからの社会を担っていく若い世代に，まず問題意識を持ってもらうことこそが最大の目的である。その視点で，生徒の意見・感想を考察したい。

(a)(b)共に，性・セクシュアリティに関することについて考えたり，真面目に話したりすることを避けていたが，授業を通して，それらについて考え，語り合うことの大切さ，奥深さに気づいている。このような意見は大変多かった。(c)はこの責任を，この社会を作り上げた大人の精神的な未熟さと指摘している。さらに(d)は自分自身が抱いたこの授業への「嫌悪感」をしっかりみつめ，分析することを通して，個人にとって，いかにセクシュアリティが根幹に位置する重要な柱であるかを感じ取っている。それ故，つまり自分を守りたい，他人に侵されたくないという気持ちがセクシュアリティを語られ難くしていることを感じ取ると同時に，それほど大切なことだからこそ，勇気を出して自分自身をみつめなおそうとする内面の葛藤が伺われる。

特に授業で，「男が上」などの言葉は出なかったにも関わらず，様々な発言などから感じ取ったであろう男女平等の意識は，(e)と(f)で男性と女性の意識のずれをみごとに示している。しか

し，(g)の男子は，その男性特有の意識が男である自分に全くないことから，その意識が本能的なものではなく，後天的なものだと証言している。(h)の女子は，素直に自分の恋愛観に結びつけながら，男性との意識のずれを指摘している。性に関することも含めて，(i)は青年期の男子として，その微妙に揺れる自分の気持ちを表しながらも，女性の基本的人権を奪うことの不合理さを認識している。

授業の内容を，直接自分自身に突き付けて考えてある感想も目立った。例えば，(j)の体験談は，まさに現在の日本社会のセクシュアリティを反映している。授業を通して，彼女自身が，自分の立場や怒りを正当化することができたとしたら，本当にこの授業をやってよかったと私自身思う。この授業は一般論で終わってしまうのでは，何の意味もない。この授業を通して，一人一人が少しでも楽になれたら，自分を認められたら，そして，前向きになれたらいいと思う。その意味で，(k)の言葉もとても嬉しい。

授業から，(l)のように物事をみる姿勢そのものを学び取ってくれたことを示す感想もあり，こちらの意図以上に生徒は沢山のことをつかみとってくれたようであった。

セクシュアリティにまつわる様々な問題は，今のところまだ手付かず状態であり，それらの諸問題は非常に根が深い。生徒たちの世代は，まず，それらをきちんと「問題」として認識することが第一の課題である。多くの意見・感想から，この授業がその問題提起となり得たことが読み取られた。それらの問題を自分に引き付け，自分のセクシュアリティをみつめるきっかけとなった生徒も多かったようである。

但し，生徒がもっと自分の意見を発言できるよう，時間的考慮を行い，討論する時間をとることを，次回への課題としたい。

Ⅳ　授業全体の考察

1．生徒の感想

(a) こういう，人間社会を深く考えさせる授業が本当の教育なんじゃないかなって思う。英語や数学の時間よりも家庭科の時間が一番学校にきているんだって感じる。

(b) 全て興味深い授業だった。男女間で質問し合ったり映画をもとに授業をすすめたり，始めから気を引く内容が多く，しかも新鮮だった。学校の授業で，こういうことができて，本当に嬉しかった。形式ばった授業よりみんなでこうやって作り上げられる授業って本当にすばらしいと思う。

(c) いやぁ，楽しかったです。心の内面をえぐる問題に突っ込めて，おもしろかった。国語とか数学以上の価値があったのではないかと思う。とにかくよかったです。

(d) 家庭科といえば調理実習や製作を思い浮べるけど，これからの社会で生きていくためには，それだけでは足りない。この授業でやったようなことも考えないとダメだと思った。これで終わるのは残念です。

(e) 「自分」というものについて，深く考えてしまう年頃ですが，私は，「自分」というものがどういう人間かはよく理解しているつもりでいます。この授業のどこに「自分探し」があるのだろうか…？と思ってしまいました。

(f) 正直言って，まだ「自分」は見つけられません。でも，何かを得るきっかけはつかめたと思います。

(g) 今まで，「自分」という人がどんなことをするのか，したいのか，できるのか，ばかり考えていたけれど，「自分」は何なのか，どんな存在で何を考えているのかについては思っても

みなかった。だけど，一連の授業で少しづつそれがわかりかけてきたような気がします。

(h) やはりキツかったというのが本音。自分の駄目さを改めて認識したようだった。

(i) 自分について考えてみると，今まで自分が信じてきた「理性」や自分の本性というものが本当はどういうものなのかわからなくなってきた。ぼくはどこまで自分を信用していいのだろうか。もう少し自分について考えてみようと思う。

(j) このように，人間を対象にする研究はとてもおもしろそうだと思いました。大学では，こういうのは何学部でするんですか？

(k) 今の自分は２つの両極面を持っている。一つは男にも負けたくないという闘争心を持つ強い私。もう一つは「やっぱ，女は男に愛されてなんぼよね。」という弱い私。時々弱い私が全開になる時がある。そんな時本当に思う…「男って得だよなぁ。純粋に人と争えて，争って勝つことで自分も満足，周囲からも誉められるもんなぁ。それに引き替え，争って勝った女に与えられるのは非難の声ばかり。」そういう時,「あぁ,私も可愛い女になりたいなぁ。」と思ったりする。けれど私はやっぱりこれと信じる道を曲げようとは思わない。そして私は，こういう頑固な私も結構好きだったりする。ただ，強い私にも弱い私にもどこかに無理がある。

(l) 「自分探し」というタイトルが授業にそぐわないと言った人もいるようだが，自分はこのタイトルのお陰で，この授業を受けている自分の存在理由を見つけることができた。授業に耳を傾ける傍ら，行っていたことは，まさに「自分探し」であった。自分をいちいち振り返り，自伝を書いているようだった。

(m) どれもこれも，私が一人，心の中でひそかに人に隠すかのように不安を抱きながらも口に出せなかったことです。でもこうやって堂々とその話ができたということが私にとってどれだけ救われたことか。きっとこのような人は他にも沢山いると思います。いつも心にふたをして不安でいるよりも，こうやって人に話して，また人の意見を聞いてみることのすばらしさ，有り難さを実感しました。きっと私たちの‘考え方’を‘考えさせられる’忘れられないものになると思います。

(n) 「自分探し」というよりは「性」といった感じだった。しかし，自分の性意識について考えることはすなわち，自分を見つめることにつながっているのは間違いない。この授業を受けて，人間社会の教育の中で，なぜこの「性」だけが遅れを取っているのか不思議だと思った。遅れていたこの関連の授業を受けれたことを感謝したい。

(o) 一番の感想は,男のやることを知るうちに,男のことがどんどんわからなくなっていくなぁということです。男女で討論する機会もあったらよかったと思います。

2．考　察

感想の中に，(a)(b)(c)(d)にみられるように，授業方法・内容について，価値がある，興味を持てた，おもしろかったとの肯定的な意見が強く出たものが多かった。

極稀に，(e)のように，自分のことは自分でわかっているから授業で何を取り上げられても意味がない，というような意見もあった。個人個人で色々な考え方があり，当然そのような意見もあるだろうと予想していた。しかし，思っていたよりもその数は少なく，各クラス一人程度であった。

(f)のように「自分探し」のきっかけだけはつかめたという者や(g)のようにありのままの自分を見つめることが「自分探し」のスタートだったのだ気づく者もいた。(h)のような意見も複数あったが,「キツイ」と感じることはすなわち，それだけ真剣に自分をみつめることのできた証

拠であろう。同様のことが(i)からも読み取れた。今まで信じてきた自分の価値観をみつめ，疑うことは，高校生という若い世代にとっても辛い作業に違いない。しかし，今視野を広げ，自分の価値観を耕すことは，人生において，かならずプラスになるに違いない。生徒自身も，そのことは，感じているのだろう。また，(j)のように将来の進路に結びつけた者もいた。

今の自分にしっかり引き付けてあるのが(k)(l)(m)などである。(k)は，自立意識の高い女性の多くにみられる本音でもある。一人の人間として自分が頑張ることが，一人の女としての値を逆に下げてしまうことは多い。その矛盾の背景に，ジェンダーやセクシュアリティの問題がある。「強い私」と「弱い私」を区別することなく，ただの「私」として彼女が生きていけること，それができる社会を願いたい。(l)は，タイトルからは一見ピンときにくい「自分探し」の意図をよく見つけだしている。授業で扱った教材は，単に知識を与えるだけでないことはもちろん，一般論や他人ごととして考えるだけのものでもない。全て，この生徒が行っていたように自分にひとつひとつ照らし合わせて自分を見つめてほしかった。それこそが，「自分探し」なのである。(m)のような感想を持ってくれた生徒がいたことは，それだけで，この授業を行った意味を示していると思われる。

今後への課題として，(l)のような意見もあったものの，(n)をはじめ，幾人かの生徒から，「自分探し」というタイトルよりも，「性」「異性」などの方がふさわしいのでは，というような意見があった。最終的な意図はそうであっても，タイトルとしては生徒にわかりやすいほうがよいのかもしれない。サブタイトルとタイトルを入れ替えるなど，工夫してみたいと思う。また，(o)や§２異性の感想にもあったように，授業時間数の検討の上，生徒同志の意見交換をフリートークなどを用いて行うという方法も取り入れたいと思う。

生徒の意見・感想から，価値観が全面に出，かつ，個人的と思われがちで，タブー視されやすい「性」に関する内容の授業をすることに，生徒は，ほとんど肯定的であったことがわかった。また，自分自身をみつめる，という本授業の目的も，多くの生徒が一人一人のスタイルで行っていたようであった。

今後の授業の課題として，以下の６点が挙げられる。

1）タイトルの再考
2）フリートークなどを含んだ，授業方法の検討
3）授業時間数の検討
4）§３美の鎖の必要性の検討
5）客観的授業評価の方法の検討
6）「セクシュアリティ」以外の領域の教材開発

Ⅴ．おわりに

男女必修となった家庭科では，男女共生社会の実現をその中核に掲げている。しかしながら，ジェンダーやセクシュアリティについて扱う教科書はほとんどなく，取り上げてある場合も極簡単な説明のみに留まっている。異性への関心も強い青年期において，マスコミ等の興味本位の情報に流されるのではなく，真面目にジェンダーやセクシュアリティについて語ること，考えることは，彼らが今後創り出す社会の有り様をよりよくする上でも，自分自身を深く見つめ，自分の価値観を育てる上でも大変重要であろう。

本研究では，ジェンダーやセクシュアリティに焦点を絞り，自分自身を見つめなおす「自分

探し」の授業を行った。生徒は，予想以上に，前向きに取り組み，教師の意図以上のことを学び取ってくれたと思う。この視点を，授業だけで終わらせることなく，今後の自分の人生に大いに役立てていってほしいと思う。

最後になりますが，本授業作成にあたり，ご指導頂きました金沢中央高等学校の寺島紘子先生に心よりお礼を申し上げたいと思います。

―引　用　文　献―

1）小倉千加子「女の人生すごろく」筑摩書房，195-196，1990
2）上野千鶴子『差異の政治学』「ジェンダーの社会学」岩波書店，7，1995
3）上野千鶴子『セクシュアリティの社会学・序説』「セクシュアリティの社会学」岩波書店，6，1996
4）角田由紀子「性の法律学」有斐閣選書，33，1991

―参　考　文　献―

1）小倉千加子「セックス神話解体新書」学陽書房，1988
2）上野千鶴子「セクシィ・ギャルの大研究」光文社，1982
3）駒沢喜美 編「女を装う」勁草書房，1985
4）分校淑子「『自分』探し―〈異性にききたいこと〉を通して―」「くらしと教育をつなぐ We」フェミックス，6巻5号，1997
5）分校淑子「『自分』探し― セクシュアリティをみつめて―」「くらしと教育をつなぐ We」フェミックス，6巻6号，1997